

ブドウ 'ハニーシードレス' の適正着果量と適正収量

佐藤 孝宣・佐々木 恵美・工藤 信

(山形県立園芸試験場)

Optimum Fruit Bearing and Optimum Fruit Yield of Grape 'Honey Seedless'

Takanobu SATOH, Emi SASAKI and Makoto KUDOH

(Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station)

1 はじめに

山形県におけるブドウ栽培の現状は、1980年の栽培面積3,780haをピークに年々減少しており、1996年は2,320haと約1,500ha減少している。その要因として、① 'デラウェア' 偏重による価格の低迷、②栽培農家の高齢化と後継者不足、③大粒種など新品種の生産不安定などが上げられる。現在のブドウの品種構成は、'デラウェア' が主体で全体の70%以上を占めている。しかし、消費者の嗜好は 'デラウェア' よりも大粒で味の良い高級ブドウへ移行しており、新しい品種の導入にも積極的に取り組んでいく必要がある。

'ハニーシードレス' は果樹試験場カキ・ブドウ支場において、'巨峰' と 'コンコード・シードレス' の交配により育成された新品種である。山形県立園芸試験場では、1986年から系統適応性検定試験を実施しており、その結果1994年に県の有望品種に取り上げられ、普及拡大を図っている。この品種は糖度が高く、皮ばなれよく食味良好であるが、着果量が多すぎると、品質が劣る傾向にある。

そこで、'ハニーシードレス' の高品質安定生産技術を確立するため、適正着果量、適正収量について検討した。

2 試験方法

1996年現在、場内12年生 'ハニーシードレス' 2樹 (台木テレキ5BB) を供試した。試験区は主枝単位に1新梢に1果房、1.5果房、2果房の3区とし、1.5果房区は結果母枝先端から発生する強い新梢に2果房、基部の弱い新梢に1果房着果させ結果母枝平均1.5果房の着果基準に調整

した。着果量の制限はジベレリン処理前の6月中旬に副房と上部支梗2段を切除し、所定の着果基準に摘房した。ジベレリンは満開3~5日後に100ppmの濃度で浸漬処理した。

果実品質は収穫時 (1994年は8月31日、1996年は9月5日) に各区10果房を供試し、果房長、果房重、着粒数、着粒密度、1粒重、屈折計示度、滴定酸度 (酒石酸換算) について調査した。着粒密度は軸長1cm当たりの着粒数で示した。

新梢長、新梢の登熟率は全新梢について、落葉前の10月中旬に測定した。新梢の葉面積は20本の新梢について新梢長と葉面積を測定し、新梢長Xと葉面積Yの回帰式、 $Y = 19.21X - 82.57$ $r = 0.990^{**}$ から求めた。葉面積指数は新梢の葉面積と樹冠面積から計算した。10a当たり収量は樹冠面積、各試験区の収量から換算した。

3 試験結果及び考察

果房重は2か年とも1房区、1.5房区、2房区の順に重く、着粒数も着果量が少ない区ほど多かった。着粒密度は1房区、1.5房区は適正であったが、2房区はやや粗な果房がみられた。屈折計示度は1996年は各区に差は認められなかったが、1994年は2房区が他区に比較して低かった。1粒重、滴定酸度は処理区間に差は認められなかった (表1)。

平均新梢長及び平均登熟率は1房区が他区に比較して短い傾向であった。平均登熟率も着果量が少ない区ほど低い傾向であったが、各区とも60%以上であり実用上問題ないものと考えられた。葉面積指数は1994年は1.7~1.9、1996

表1 'ハニーシードレス' の着果量と果実品質

試験区	年度	果房長 (cm)	果房重 (g)	着粒数 (個)	着粒密度	1粒重 (g)	屈折計示度 (%)	滴定酸度 (%)
1新梢当たり 1.0房	1994年	19.8	315	86.9	5.6	3.4	19.4	0.33
	1996年	17.8	348	77.6	6.2	4.4	19.4	0.42
	平均	18.8	332	82.3	5.9	3.9	19.4	0.38
1.5房	1994年	19.0	312	73.8	5.1	3.9	19.1	0.36
	1996年	17.4	312	74.2	6.1	4.0	19.9	0.42
	平均	18.2	312	74.0	5.6	4.0	19.5	0.39
2.0房	1994年	18.1	258	68.7	4.6	3.5	18.2	0.35
	1996年	17.6	308	69.5	5.8	4.2	19.7	0.40
	平均	17.9	283	69.1	5.2	3.9	19.0	0.38

注. 着粒密度は軸長1cm当たりの着粒数

表2 'ハニーシードレス' の新梢の生育と収量

試験区	年度	平均新梢長 (cm)	平均登熟長 (cm)	平均登熟率 (%)	葉面積指数	10a 当たり換算収量 (kg)
1 新梢当たり 1.0房	1994年	140.6	89.3	63.4	1.72	1,185
	1996年	215.2	143.7	64.5	1.84	1,543
	平均	177.9	116.5	64.0	1.78	1,364
1.5房	1994年	173.2	119.3	69.2	1.93	1,868
	1996年	273.3	211.9	77.4	2.48	1,839
	平均	223.3	165.6	73.3	2.20	1,854
2.0房	1994年	135.8	90.3	66.6	1.81	2,478
	1996年	268.3	213.9	79.6	2.16	1,997
	平均	202.0	152.1	73.1	1.99	2,238

年は1.8~2.4の範囲であった(表2)。

10a 当たり換算収量は果房重、葉面積指数の関係から、年次によりやや変動はあるものの、1房区が1,300kg、1.5房区が1,800kg、2房区は2,200kgであったが、2房区は商品性の低い果房もみられた。

以上の結果から、'ハニーシードレス' の商品性の高い果実品質の目標値(果房重300~350g、着粒密度5~6、屈折計示度19%以上)に2か年とも達した区は1房区と1.5房区であった。

4 ま と め

ブドウの新品種 'ハニーシードレス' の高品質安定生産技術を確立するため、適正着果量、適正収量について検討

した。

果房重は1房区、1.5房区、2房区の順に重く、着粒も着果量が少ない区ほど多かった。着粒密度は1房区、1.5房区は適正であったが、2房区はやや粗着な果房がみられた。屈折計示度は2房区がやや低い傾向であった。

10a 当たりの収量は、1房区が1,300kg、1.5房区が1,800kg、2房区は2,200kgであったが、2房区は商品性の低い果房もみられた。

以上の結果から、果房の形状、屈折計示度など総合的に判断して、'ハニーシードレス' の着果量は1新梢平均1.5房程度、10a 当たり収量は1,800kg程度が適正と考えられる。